

児科 245で圧倒的に多く、内科 105, 外科91, 整形外科 65, 耳鼻科63, 産婦人科53, 脳外科50で、救急車搬入・救急診療部受付ともに非外傷が多かった。

受診曜日については、CCU出動が平日・休日の差がみられないのに比べて、救急車は日曜、土曜が多く、救急診療部は日曜あるいは連休最後の休日から翌日朝までの24時間が一番少なく、祭休日前夜16時からの17時間が、平日16時から翌平日朝までの17時間より来診者がはるかに多かつたことから、救急診療部受付は患者の不安感と無関係ではないと考えられた。

さらに救急診療部患者の住所別に診療圏を調査した結果、昼間普通受付患者と比較すると、最も近い500m圏内と最も遠い他府県がほぼ同率で逆転しており、1km圏からの来診割合は救急診療部も昼間の普通受付新来数もともに新宿区から来診した総数のおおの約70%を占めていた。しかしながら、昼間と夜間が同じ、あるいは夜間の方が来診者の多い町もあつたことなどから、昼間と夜間によつて病院を利用する層が異なることが想像され、地域病院の利用され方の一端を知つた。

37. いわゆる diaper dermatitis について

(皮膚科) ○西内 柳・大塚 末野
細木 梅子・橋本 律子・浜田 玲子

乳児の diaper dermatitis は、臨床上多数認められる皮膚疾患であり、Cooke (1921) 以来、尿刺激によつて発症すると考えられていたが、近年この尿刺激説を否定するものが多く、特に Candida の存在が重視されている。すなわち、Montes らは diaper dermatitis の患児35例の全例に Candida を証明し、五島、渡辺らも本症における Candida の重要性を報告している。また山田らは、本症の全例について真菌の検索が必要であると言っている。このような増加の原因としては副腎皮質ホルモン含有外用剤の濫用が考えられているが、われわれは、当教室における“いわゆる diaper dermatitis”について報告するとともに、その他の皮膚カンジダ症の動向についても調査したのでその結果を報告した。

38. 働く主婦と育児の問題

I. 至誠会員の概況調査

(一三会) ○土肥 浩子・松野マサヨ
浦田とめ子・三好 静鹿・清水五百子
佐藤柳子枝・中川 貞子・矢野千鶴子
岩本由基枝・笠井 和

第二次世界大戦後、男女同権となり、経済復興に伴ない家庭の電化も進み、主婦の仕事が軽減され、一方、人口構成の面で婦人の労働力の需要もあり、婦人が家庭外

に職業を持つ場合が多くなつた。大多数は結婚前の4～5年間で、家庭を持つと職場を去るようであつたが、職業の種類により、個人的意思により、また経済的事情により、結婚後も仕事を続ける婦人が増加し、社会も必要性をみとめ、共働きの家庭が多くなつた。この場合、子供の生れる前は割に問題ないが、生れると育児に関して種々の問題が生じる。本校卒業生はその職業の性質上、早くからこの問題に直面して来た。私共は働く主婦と育児の問題を取りあげるにあたり、その実態を知ろうとして、先ず本校卒業生に限つて調べて見た。

至誠会員 940名に対しアンケートによる調査結果の集計である。卒業年度により大正末期卒業から昭和40年卒業までとし、これを4つの時期にわけてアンケート送付対象とした。返送数は470、子供のない人をのぞくと350名となる。

夫の職業別、妻の職業態別、卒業年度別、都鄙別、年齢別等による集計、母が仕事をもつことにより子供に何らかの影響があるか、若しあれば防ぐための手段等、周囲の大人のあり方、父母としての反省、希望等につきまとめた。

〔特別講演〕

糖尿病の臨床

(東大教授) 小坂 樹徳

医学の進歩に伴つて、糖尿病に関する理解が深まれば深まるほど、本症は極めて複雑な内容をもつ疾患であることが明らかにされてきた。したがつて今日における糖尿病の臨床には、この点に関する十分な認識が必要であり、かつ常に明日の問題が新たに提示されねばならない。

糖尿病の臨床の分野は極めて広いが、私は特に、

(I) 糖尿病診断の進歩

- 1) 糖尿病と糖負荷試験
- 2) 糖尿病患者における血中インスリン動態の基本的異常
- 3) 糖尿病診断の新しい方向

(II) 糖尿病患者の予後と管理の問題

- 1) 予後と死因の推移
- 2) 血管障害の進行と管理、とくに食餌(制限)療法の意義

に関し、過去6年間、東京女子医科大学第二(小坂)内科において、教室員各位と共に検索した成績を中心に述べるとともに、さらにこの分野において今後解決すべき諸問題を指摘し、第38回総会において私に課せられ